

哲学的問い:はたして自己に真偽などあるのだろうか (何が偽を意識させるのか)。偽我を没した人が神を求めるだろうか。偽我が求めるのが神であり、神こそが究極の偽我(エゴイズム)ではないのか。独我論を脱したところに神仏は必要なのか。

具体的にいえば、神(真の自己)つまり経験があつて個人がある。神(真の自己或いは真物)と偽我は上述のような対応関係にある。しかし、真の自己(真物)を追求するのは既に偽我である。したがって、神仏(真の自己或いは真物)は必要であるかという問いが出てきた。ある方はそれは煩悩であると指し、認識する自己の地平から一步を出て、対象化しないような形で偽に目覚めさせると主張した。佐野先生は「何が」に着目し、真の自己と偽我を分けることは実は自分(偽我)の都合のいいように分別すると考え、分別をすること自体は我々が物事を対象化して自分の存在を確認するからであるとした。つまり、真と偽を分けて、真を追求すること自体は偽我にある。この点に関して、ある方は「理性になりきろう」という要求が自然に出てきて、その要求に従い、「真の自己になる」を目指して努力するのは偽我ではないと考え、「真の自己になる転換」は自己の側にあると主張した。佐野先生は「真の自己になりきる」ことも目的を立てるのであり、「目的を立てない」ことも既に目的を立てたとし、さらに、「人間の意識構造のゆえに、人間は意識的自分は真の自分であると思う。我々は常に本当の自分が生きていると思う」とした。したがって、「人間は自分の力で自分の偽を分らない、神(真の自己)によって我々は偽我を自覚することができる」という論点に帰結する。神(真の自己)と偽我とは「逆対応」の関係にある。

本文要約：4-2-1 神は人間の目的であり、人間は神の物である。人は神に帰するのは一方よりみれば己を失うようであるが、一方よりみれば己を得るのである。それは真の宗教における神人の関係である。神は生命の源である。真の宗教こそ生命に充ち、真の敬虔の念も出でくるのである。神において真の自己を見出すのはかえって自己の臭気を脱し、真に己を捨てて神を崇ぶのである。

4-2-2 神人同性であり、人は神においてその本に帰すというのは全ての宗教の根本的思想である。この思想の上においてもまた神人の関係を種々に考えることができる。有神論の考えは、神は宇宙の外に超越し支配するものであつて、人に対して外から働くものである。汎神論の考えは、神は内在的であつて、人は神の一部であり神は内より人に働くものである。汎神論には神の人格性及び超越性を失い、悪の根源も神に帰せねばならないという批判がある。しかし、神と実在の本体とを同一視するも、実在の根本が精神的であるとすれば必ずしも神の人格性を失うこととはならない。また、汎神論であつても万物そのまま直に神であるというのではない、万物は神の差別相(スピノーザ)である。また、有神論においても神の全知全能とこの世における悪の存在とは容易に調和することはできない。

4-2-3 我々が神意として知るべきものは自然の理法のみである、このほかに天啓というべきものはない。我々の神とは天地これによって位し万物これによって育する宇宙の内面的統一力でなければならない。もし神が人格的であるというならば、実在の根本において直ちに人格的意義を認めるとの意味でなくてはならない。 唐露記